
この時間（とき）がずっと続きますように.....

和藤渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この時間ときがずっと続きますように……

【Nコード】

N1918E

【作者名】

和藤渚

【あらすじ】

これはべた恋企画の第1回出会いをテーマにした作品です不良少年といじめられっ子のお話

その日いつものように登校する私。

そのたびに突き刺さる鋭い視線。

「またきたよ」

「あいつ、まだこりてないみたいね」

と小声でヒソヒソ話する周りの人たち。

そんなのも気にせず自分の席に向かう。

そして机には余白がないほどびっしり書かれた落書き。

その中に際立って大きく書かれた“死ね”という文字

死ね

死ね

死ね

死ね

それを見た瞬間私は決意した。

死のう……

私は密かにしっかりとした決意を持ちながら授業を受ける。

一方

俺はケンカに明け暮れていた。もちろん好きでしているわけではない。

「お前らもこりずにキタネエーな！！　いつもいつもうるせー」

「少しは、まともなやつ連れてきたのかよ？」

「ふん、今のうちだぜ。余裕コイタこと言えんのは。やつちまえ！！」

と50人程のガラの悪いバカたちが向かってきた。

「あゝもうつぜえゝやつらだなゝ」

瞬殺で終る。

「大丈夫か？　たくつお前もお前だぜ。なんでいっつも捕まるんだよ？　逆に尊敬に値するぜ」

「そうですか？」

と誇らしげに言う人質。

「褒めてない、褒めてない」

毎回捕まるバカがいるからだ。

そのため学校始まって以来の問題児と言われまるでゴミ扱い。

「日本全国のゾクを統率している」

とか

「200人以上のヤーさんを一撃で全員KOさせた」

とか

「目を合わせただけで殺される」

とか変な武勇伝をつかまされている。
ハタリ

授業に出れば出たでまるで触らぬ神にたたりなしと言ったように、余計な刺激を与えないようにと異様な緊張感に包まれる。

その日も俺は屋上でフケていた。

「もうこんな時間か」

空は西日が射していた。

どうやら和馬はいつの間にか眠っていたようだ。

（あれ？）

と目を何度もこすり、凝らしてみてる。

するとフェンス越しに立っている女の子の後姿。

寝ぼけているのかと自分を疑った。

「おい！！テメえー何してんだ？」

「！！！」

女の子は一瞬びっくりしたような表情で振り向くが冷静に

「私、これから死ぬのよ？ 飛び降りて死んでとてもいい世界に行くの。」

と淡々と語る女の子。

（こいつなにいつてんだ？ バカだろ！）

と和馬はさほど本気にしていなかったので

「そっか。とてもいい世界に行くのか。そりゃ良かったな。じゃあ俺帰るから。」

警備員がかぎかけの前になつさと帰るんだぞ？」

と彼女に背を向けた。

「じゃあね」

と彼女は挨拶したので挨拶を返そうと振り返ると

彼女は飛び降りた

（嘘だろ！！！！）

和馬はとっさにカバンを投げ捨てフェンスを飛び越え、飛び降りた。そして彼女をかばう様に抱きしめた。

幸いにも大木がクッションとなりかすり傷程度で済んだ

「いつてー……大丈夫か？ たくっホントに飛び降りる奴がいるかよ」

呆れ顔な和馬。

内股ですわり両手を突きうつむく女の子。

女の子から涙が零れた。

「おい！！ どこか痛いのか？」

「……ううん。大丈夫。私に関わらない方がいいわよ？」

と彼女は小さく返事をし、警告した。

「ああ……」

翌日

ドスッ！！

と和馬は屋上から見下ろす。すると女の子たちを見つけた

「あ！ 昨日のやつだ。なんだ？ あれ」

真紀は放課後の校舎の裏の壁に打ち付けられ反動で座り込む。真紀のクラスほぼ全員が集結していた。

「昨日飛び降り自殺したんだって？」

と主犯格の女が仁王立ちで腕組んで見下ろした。

「マジかよ！ でなんで生きてんだよ？」

と驚く男子。

「誰かが助けたらしいのよ？」

「なんでもそれが一条和馬らしいのよ」

「ウソだろ！！？」

「何？ 一条和馬にボディガードでも頼むつもり？」

「……」

黙り込む真紀。

「黙ってちゃ分からないでしょ！！」

顔をおもいつき蹴った主犯格。

「うつ」

真紀は顔を歪め前のめりになる。

「その身体からだと引き換えにボディガードを頼んだんでしょ？」
また主犯格が蹴った。

「ねえそうなんでしょ！ この変態が！」

と踏みつけられる。

「違う！ そんなこと……誰か助けて……」

「うるさい！ しゃべるな！ 菌がうつる！ あんたみたいなゴミを助けるやつなんているわけないじゃない。あんたは生きているだけで地球を汚染してるのよ！ わかってんの！！？」

胸倉をつかまれ突き放された。そして壁にぶつかる。

「ゴミでもちゃんと使ってあげないとね？」

ボロボロになっっている女の子にそう話しかける。

「男子たち？ こいつを有効活用してやんな？」

とズボンのチャックをみんな下におろしてどんどん近づいてくる。
するといきなり男子の何人かが吹っ飛んだ。

「一条和馬！！！」

「貴様！！ どからわいてでた！！」

驚くクラスメートたち。

そして主犯格の女にゆっくりと近づく。ものすごい威圧感。いやその言葉だけでは到底かないそうにない感覚。

「な、何よ！！」

今にも主犯格の女はおじけ付きそうだが、それを阻止しようと必死に気を張っている。

和馬は主犯格の女に前立つと容赦なく右ストレートを食らわせ、3mほど吹っ飛ばした。

主犯格の女は壁に打ち付けられその反動で座り込む。

「ふん。最低な奴だとは思ってたけど容赦なく女に手を出すなんて本当に最低ね」

と主犯格の女は手で口を拭きそうつぶやく。

「どっちが最低なんだよ？ 女に容赦なく手を出す俺とクラス全員で集団レイプを煽ってるその女。さうどっちだ！！？」

そう言っていくうちに他の奴らはどんどん逃げていく。

「オレしらねーぞ」

「私辞める」

そして主犯格の女一人になった。

「覚えてなさい」

と主犯格の女は逃げて行っった。

「大丈夫か？ ボロボロじゃねえか」

「なんで来たのよ？」

「屋上から見えたからなにかなとおもってな」

二人はとりあえず保健室へ行き応急処置をして帰った。

そのときもう大丈夫だからと言うが明らかに無理をしてるのが見え見えな態度な女の子。

「バーカ。あんなことされて『はい、そうですか』って言って帰れるわけねえ〜だろ」

とういうことでその女の子を送って帰ることにした和馬。

「お前名前は？」

「二ノ宮真紀です。あなたは？」

「一条和馬」

サバサバとした会話。

しばらく沈黙が続く。

横断歩道の信号が青信号が点滅し、急いで渡っている人たちの中一人立ち止まる女の子
ブップー

車が発進し、クラクションが鳴り響き迫ってきているのだが、彼女は一步も動かない。

「おい！！！！早くしろ！！」

と呼びかけても動こうともしない。

和馬はその中に飛び込み彼女を抱きかかえ横断した。

彼女は涙を零して

「なんで……なんで死なせてくれなかったのよ！！！！」

と叫ぶ真紀。

「バカか！！！！お前は！！！！」

「ここには私の居場所がないの……」

ついに泣き出す。

このまま家に帰えせば本当に自殺しかねないと考えた和馬はここら近いともあって自分の家に招くことにした。

和馬の両親は海外で働いているため現在一人暮らし。

もちろん女の子を自宅に招き入れるのは初めてだ。

普通こういうときは緊張するモノである。

しかし彼女の場合、別の緊張である。

まず玄関で傷つけられそうな物を探す。

（無いな）

「とりあえず、入れよ」

と平常心を保とうとする和馬。

「あ……はい。お邪魔します」

「ちょっと待ってろ」

と居間を片付けていた。

すると真紀が入ってきた。

そこには足の踏み場が無いほど散らかった部屋があった。

（汚い……）

と思った真紀はスイッチが入った

「一条君！！燃えるごみと燃えないごみ、ペットボトルちゃんと分別しないと！！それにインスタントばかり体壊しますよ？服散乱してるじゃないですか！！どれが洗濯物かもわからない」

とまるで親が子供に説教するように饒舌になった真紀は手際よく片付けた。

「ふ」

と汗をぬぐう真紀。

ドキツとする和馬。

すると真紀は我に返った。

「あ！ すいません！！ すいません！！ すいません！！ ついスイッチが入ってしまっ……」

「気にするなつて。部屋もきれいになったんだし」

（問題……ねえな。）

と安心した和馬は

「なんか食つか？」

「私、作ります」

「いいつてあんたは客なんだからさゆっくりしなつて」

「いいいえわざわざ家まで入れてもらって悪いから」

「ならお願いすっかな？」

台所の包丁が目に入る

「いや、俺がやる」

「でも……」

「でもないー!」

と睨みつける。すると彼女の顔は曇った。

「すいません」

（言い過ぎたか？）

「お前は客だ。だからここでじっとしてろ」

久しぶりに台所で作業をする。

まず溜まった食器の山を片付け、冷蔵庫に入ってる使えそうな食材を適当に取り出し

料理を始める。

完成し部屋にもって行く

彼女を見ると本を読んでいた。

「おい？ それなんだ？」

「インジョン・ライダーの紙ひこうきです。」

紙ひこうきっていうのは心を閉ざした少女に毎日書いた手紙を紙ひこうきにして彼女の部屋に飛ばしてどうのこうのっていう恋愛マンガである。

それを聞いた時和馬は目が点になった。

「おまえ……おもしれーか？ それ」

「はい」

と真紀はニコツと笑う。

「この人の作品好きなんですよね。何と言っても青春を返せですよ
ね」

青春を返せっていうのはある日高校生が殺されあの世にいくがひょんなことから生き返り

それからというものの毎日奇妙なことばかり起きるコメディーでその人の初連載の作品である。

「それより飯にすんぞ？ もう俺は腹減って死にそうだな」

「そうですか」

と彼は食事を取り始めた。

「どうだ？」

「おいしいです」

「そうか」

「こんなにうまく料理できるのになんでしないですか？ もったいない」

「当たり前だろ？ メンドクセーんだよ」

「でもじすいした方が食費やすくなりますよ」

「うるせーさっさ食べる」

「で？なんでそんなに死にたがるんだよ？」

「言っただしよう？ココには居場所がないって」

「どういうことだよ？」

「なんであなたにいわなくちゃいけないんですか？」

「言いたくねえくなら別にいいけどよ。まあ俺も同じようなもんだからな。好きでケンカしてるわけじゃねえのによ。みんなから疎ましく思われてよ？いつの間にか変な武勇^{ハッタリ}伝流されるしょ？」

「どんなのですか？」

「200人のヤーさんを一瞬で倒したとかよ？」

「そうなんですか？」

「なもんできるわけねえくだろ！ だいたいそんなことしてたら俺が一瞬にして死んじまう。たく酷いよな？ どいつもこいつも」

「フフフ……」

「笑うなよ」

「すいません」

「ただこれだけは言っておく。人間誰だってイヤな事ある。時には死にたくなる時も。でも死んでしまったらその時点で自分に負けるってことになるんだぞ？自分に勝てるようになれ。今は無理かもしんねえくけど。俺でよければいつでも相談にのってやるからよ。それに……」

（自分に勝てるように）

「それに？」

「それにもし死んで助けた俺が呪われたんじゃないか
いからな」

「それってどういう意味ですか！！！」

「その顔だよ、その顔。さっきよりいいぞ。だってさっきはこんな
顔してたんだぜ？」

と和馬はまるで怨念こもった幽霊のような顔をする

「してません！！」

「してた！！」

「してません！！」

言い合いをしているうちなぜかだんだん2人は笑いが込み上げて
きた

「ぷっハハハハハ」

「ハハハハハハハハ」

2人はバカみたいに笑った。

（なんでだろう？ この人いるとホツとする。それに私こんなに笑
えたっけ？）

（こんなに笑ったのっていつぶりだ？ こいつといるとなんか楽し
い。会って2日しかたってないのに不思議だな……こんな気持ち）

二人はこう思った

この時間ときがずっと続きますように……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1918e/>

この時間（とき）がずっと続きますように……

2010年10月20日19時27分発行